



# 富大考古通信

第八号

## 飛越交流に想いをさせる

学生時代は細入村<sup>いのたに</sup>猪谷（現富山市）でアルバイトをしていた。猪谷といえば、富山の中でも最も雪深い、飛騨との国境の村である。トンネルを抜ければ、もうそこは飛騨国。水面にきらめく陽光、移ろい変わる深緑、そして夜の静寂に、何度心を癒されたことか。海に近く大平野が広がる富山市街から、様子がずいぶん異なる山間の地に、思えば2年間も通っていた。

富山湾に流れ込む神通川は富山市街では川幅も広く流れもゆったりして見えるが、猪谷付近から上流は高原川と宮川に分岐し、蛇行する川筋にはいくつもの尾根が迫って川幅もいっきに狭まる。清流に沿って、狭小な空間をぬうようにはしる国道41号線と360号線は、もと高山へ通じる飛騨街道である。富山から高山まで約90km、徒歩で3日の距離である。江戸時代には飛騨街道を通じて富山から高山へ、さらに野麦峠を越えて信濃まで<sup>ぶり</sup>鰯が運ばれたことはよく知られる。猪谷には両国間の峠を管理する関所が置かれていたというから、それだけ人の往来も頻繁であったのだろう。

神通川や古道を通じて、越中と飛騨の間を多くの人が行き来した。下呂石製の石器や糸魚川産の翡翠大珠の流通、さらに北陸の縄文中期を代表する新保・新崎式土器や天神山式土器の広範な分布など、両地方間の人々の往来をものがたる資料が数多く出土している。日常的に行き来する者もあれば、彼の地の産物を求めて見知らぬ地へ旅立ったまま、そこに留まる者もいたであろう。近年では古墳出現期の北陸系土器が高山周辺の集落遺跡から出土する例が増えており、農耕経済が定着してから後も、一所に留まることなく生活をおくった人たちがいたことをうかがわせる。さらに高山周辺の中世遺跡からは珠洲焼や八尾焼が出土しており、水運を利用して一旗あげようとたくらむ者がいたかもしれない。

雨が降ろうが、雪が降ろうが、今では車や電車を使ってすう〜と通り抜けてしまう道筋も違った光景に見えたに違いない。流通や交通の未発達な時代に、人々はどのような思いを抱いて峠や急流を越えたのだろうか。学生の頃見て感じた風景に、<sup>いにしえ</sup>古への想いを重ねてみた。

（高橋浩二）

## 目次

飛越交流に想いをはせる

高橋浩二

修士論文要旨

「富山県における後期旧石器人の石材獲得行動 ー行動の変化と背景ー」

田上和彦

卒業論文要旨

「弥生時代における仿製素環頭刀の生産と流通」

今津和也

「玉作における石針の機能の研究ー穿孔実験を用いてー」

坂上菜美子

「笈ヶ岳山頂遺跡の研究～中世白山信仰の一側面～」

千葉真吾

修論・卒論発表会と追いコンのお知らせ

編集後記

## 修士論文要旨

### 富山県における後期旧石器人の石材獲得行動 —行動の変化と背景—

田上和彦

石器は後期旧石器人にとって必要不可欠な道具である。同様に石器材料である岩石も必要不可欠である。後期旧石器人にとって必要な道具を生み出す岩石を獲得しようと必ず何らかの行動を起こすはずである。本論では、この行動を石材獲得行動と呼ぶ。この石材獲得行動は後期旧石器人の一つの動態である。それを理解することは後期旧石器人の行動範囲や行動パターンを理解することに繋がる。本論では北陸地方、特に富山県に注目し石材獲得行動をダイナミックに描き出したいと考えた。また、そこから、後期旧石器人の生活の一部を復元したいと考えた。

そこでまず、石材分布(石器に使用される岩石がどこにあるか)を調べるため河川や山の中に入り、その採集地点を地図に落とした。富山県だけでなく石川県、福井県も対象に石材調査を行った。次に、後期旧石器人が残した石器を実際に観察し、使用していた石材の組成を提示した。また、石器製作と石材はとても密接なつながりをもっているので、石器製作の方法も含めて遺跡ごとにデータを抽出した。富山県は未整理、未発表の資料が多く実態の一部を把握するためにも必要な作業であった。これらの過程を経て富山県に住んでいた後期旧石器人がどのような行動をしていたかを把握する。対象とした2時期では使用石材も技術が異なり、石材獲得行動も異なる。A期は富山県で採集可能な石材を遺跡付近で採集し使用した。そして遺跡にある程度滞在し、その周辺で狩猟を行っていたと考えられる。A期の中には東北産の石材(珪質頁岩)を使用した集団の痕跡も残されており、この集団は短期的に移動を繰り返していた。A期では在地の石材を利用し、その周辺で狩猟を行った集団と遠隔地から石材と共に富山県で狩猟を行った集団が想定された。B期は遠隔地の石材(珪質頁岩)を使用し、短期的な行動を繰り返す集団が多くなった。

この違いは何を意味するのか。これらは後期旧石器時代の気候と関連しそうである。後期旧石器時代は最終氷期の時期である。最終氷期の最寒冷期という過酷な環境になり狩猟獣が減少し、獲物を求め移動する必要性がでてきたのだろう。この時期がちょうど時期の変わり目であり集団の行動が変化したと考えた。そこで、石刃技法を有した東北からの集団が、広域に遊動している一部が富山県でもみられたのだろう。つまり、B期には東からの人の移入が認められるだろう。A期からB期にかけて遊動性が高くなり、広い地域で違う集団と接し技術を高めていったのであろう。

## 卒業論文要旨

### 弥生時代における仿製素環頭刀の生産と流通

今津和也

素環頭刀は、弥生時代中期後半の北部九州社会に出現し、その後、日本列島に普及していった。近年、弥生時代における素環頭刀の地域性が明らかになり、新たな製作地論が展開された。本稿の目的は、弥生時代における素環頭刀の地域性を手がかりに仿製素環頭刀の生産と流通を明らかにすることである。弥生時代の素環頭刀を環の製作技法に着目して分類し、それぞれの型式について、共伴遺物を参考に年代を検討した。次に、各型式の分布を検討した。

以上の分析の結果、各型式が北部九州、豊前地域、山陰東部地域、北陸地域にそれぞれ分布し、地域性が明らかになった。このような地域性について、先学と同様に、製作地や流通と関連があると考え、各型式が北部九州、豊前地域、鳥取平野および丹後半島で製作されたと推測した。製作背景については、舶載素環頭刀の不足を補うためや、舶載製品を入手しやすい環境であったために製作された他に、北部九州の素環頭刀を重視する価値観の情報が伝わって、刀子の製作に影響を与え製作された、あるいは簡単な製作技術のもとで製作されたことを考えた。そして、この製作地の見解を踏まえて、弥生時代における仿製素環頭刀は漢鏡の分配システムに乗って地域内で流通したことや流通圏が拡大したことなどを考えた。

弥生時代の玉作遺跡において、しばしば石針と呼ばれる遺物が出土している。石針とは石製の針のような形態で、頭部に回転擦痕を持つことから、玉作における穿孔段階に関わる工具と考えられている。しかし石針自体で穿孔を行っていたのか、穿孔に補助的に使用されていたのかについては説が分かれている。現在では遺物の形態や出土状況から石針自体で穿孔を行っていたとする説が有力となっているが、未だに実験考古学的見地からの研究はなされていない。本研究では石針、特に磨製石針による穿孔が可能かどうかを解明することを目的とし、実際に石針を製作して穿孔実験を行った。実験では出土した遺物を参考に、以下のことを確かめるためにそれぞれいくつかの条件を設定して行った。

実験 X：石針の中には石針の頭部を鉛筆の先端の様に加工した形態のものがある。また未穿孔の管玉の中には端面に浅い傷を持つものがあり、穿孔の手順としてまず見込み孔を付けていたと考えられる。見込み孔を付けることの有効性を調べるための実験を行った。

実験 Y：石針での穿孔が不可能であるとする説ではその理由として、円筒状の石針では穿孔が進むと孔と石針の形状が一致してくるために、砥糞が排出される隙間がなくなることが挙げられている。これを解消するため、石針を交換することによって故意に砥糞が排出される隙間を作っていたと考えた。そのため石針の交換について比較する実験を行った。

それぞれの実験からは以下のことが分かった。

実験 X：見込み孔を付けてから穿孔を始めた実験では、石針の先端が見込み孔に引っ掛かり中心を定めて穿孔することが出来た。しかし見込み孔を付けずに穿孔を始めた場合、石針が滑り中心が定まらず、狭い管玉端面に穿孔することは困難であった。このことから、見込み孔を付けてから穿孔を始めることは有効であることが分かった。

実験 Y：石針を交換した場合、石針と孔の間に隙間ができ、砥糞が排出されて穿孔は順調に進んだ。また穿孔の途中から穿孔の中心が偏り、石針と孔の間に隙間ができてしまった場合も砥糞が排出され穿孔は順調に進んだ。一方石針を交換せずに一貫して同じ石針で穿孔を進めた実験では、孔が深くなると砥糞が排出されにくくなり穿孔が進まなくなった。以上の結果から、穿孔においては砥糞が排出されるように石針を交換しつつ行っていたと考えられる。

さらに穿孔することによって出土している遺物と同様に、多角柱だった石針が円柱形になった。また穿孔によって石針頭部に現れた形態には出土している石針の形態と一致するものがあった。これら実験結果から、石針自体で穿孔を行っていたとする結論に至った。

しかし前例のない実験を行ったために、今後の課題とする点も多い。本研究では穿孔方法はもみ錐で行い、穿孔する石材には緑色凝灰岩を用いたが、今後は穿孔方法の違いや石材の硬度等に注目していく必要があるだろう。

## 笈ヶ岳山頂遺跡の研究～中世白山信仰の一側面～

千葉 真吾

笈ヶ岳は白山山系の山の一つで、白山山系主峰の御前峰から北に約 16km に位置する。1905 年に笈ヶ岳山頂から経筒、仏像、鏡、刀剣類などの遺物が発見された。本論では笈ヶ岳山頂遺跡出土遺物と御前峰を中心とした白山山系出土遺物を比較・検討し、白山山系の 13～14 世紀の様相を明らかにした上で、笈ヶ岳山頂遺跡の性格を考察した。

分析はまず、13～14 世紀の遺物が多く出土している御前峰、別山と笈ヶ岳の遺物組成を比較し、それぞれの組成の違いを明らかにした。その上で、当該期の象徴的な遺物として刀剣類と仏像類を取り上げ、それぞれの山頂遺跡における刀剣類と仏像類の様相についても明らかにしていった。

分析の結果、13～14 世紀の山頂祭祀には地域差が見られることがわかった。御前峰は大量の仏像類や法具がみられ、以前と同様に信仰の中心とされていたと考えられる。別山では刀子の奉納が行われた。別山は美濃側の登山道に位置し、出土遺物にも美濃側の影響がみられることから、刀子の奉納についても美濃側の勢力によるものと考えた。笈ヶ岳は仏像類がみられるものの、御前峰とは組成がやや異なる。また、他の山頂遺跡よりも多様かつ多量の刀剣類がみられ、奉納の中心が武器であったことが分かる。

笈ヶ岳山頂遺跡の特色は「本尊（仏像）の安置」、「刀剣類の奉納」であり、この 2 点から笈ヶ岳山頂遺跡の性格を考察した。本尊の安置は宗教上の重要性を表し、13 世紀以降に笈ヶ岳を聖地として開発し、祀った宗教者がいたことを示す。多種多様な武器類の奉納は武士層の関与を推定できる。

上記の特徴と、鎌倉幕府と関係をもっていた日光男体山における武器類の出土、13 世紀の加賀馬場における武士層の介入から、笈ヶ岳を開発した勢力は加賀馬場で長吏、神主に就き強い影響力を持っていた武士勢力であると考えた。笈ヶ岳は、新たに進出してきた武士勢力によって武神を祀るための聖地として開発され、刀剣類の奉納が行われた。笈ヶ岳への登拝や奉納を本論では「笈ヶ岳禪定」と称した。16 世紀に経筒が奉納されたのは、その当時も加賀において笈ヶ岳が篤く信仰されていたことの表れといえ、13～16 世紀にかけて「笈ヶ岳禪定」は連綿と続いていったものと考えられる。

## 平成 21 年度 富山大学考古学研究室 修士論文・卒業論文発表会

日時：平成22年3月13日14:00～

場所：富山大学人文学部6番教室

当日のスケジュールは以下の通りです。お問い合わせなどありましたら076-445-6195(富山大学考古学研究室)までご連絡ください。参加を希望される方はtomidaikouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。聴講は無料ですので皆様ふるってご参加ください。

### 【修士論文】

田上和彦「富山県における後期旧石器人の石材獲得行動 ー行動の変化と背景ー」

参考文献：国武貞克 2008 「回廊領域仮説の提唱」『旧石器研究』第4号)

### 【卒業論文】

今津和也「弥生時代における仿製素環頭刀の生産と流通」

参考文献：豊島直博 2005 「弥生時代における素環刀の地域性」『待兼山考古論集一都出比呂志先生退官記念一』大阪大学考古学研究室

坂上菜美子「玉作における石針の機能の研究ー穿孔実験を用いてー」

参考文献：宮田明 2003 「八日市地方遺跡における管玉製作の技法的特徴」『八日市地方遺跡Ⅰー小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー』石川県小松市教育委員会

千葉真吾「笈ヶ岳山頂遺跡の研究～中世白山信仰の一側面～」

参考文献：時枝務 2005 『修験道の考古学的研究』雄山閣出版



# 追い出しコンパのお知らせ

寒気も少しずつ緩みはじまりましたが、皆様いかがお過ごしですか。  
さて、富山大学考古学研究室では、3月13日の修士論文・卒業論文発表会の後に追い出しコンパを行います。ご多忙中とは思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：3月13日 18:30～

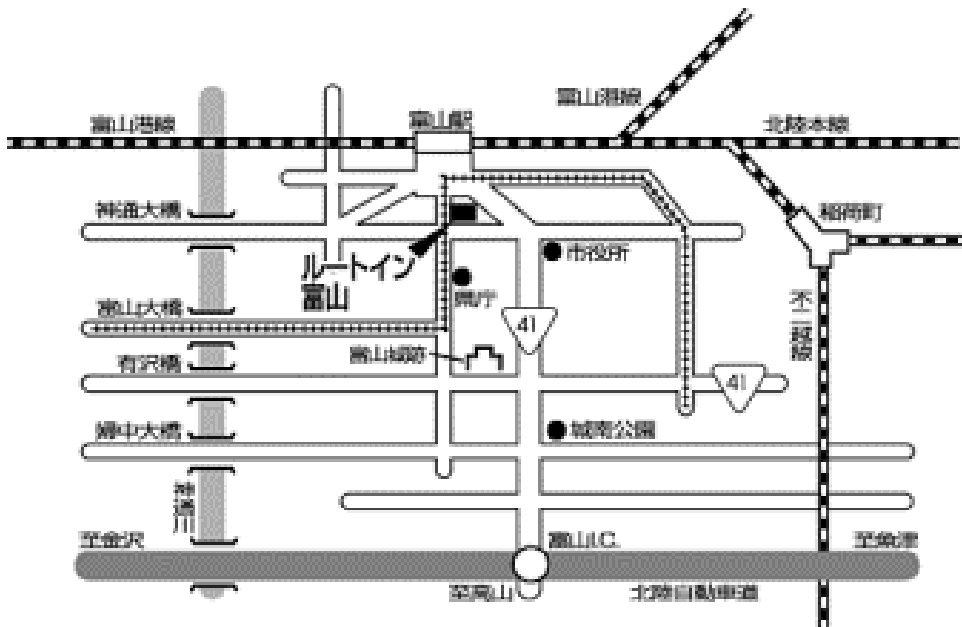
場所：一次会・・・はなの舞 費用 3700円

二次会・・・笑笑 費用 2500円

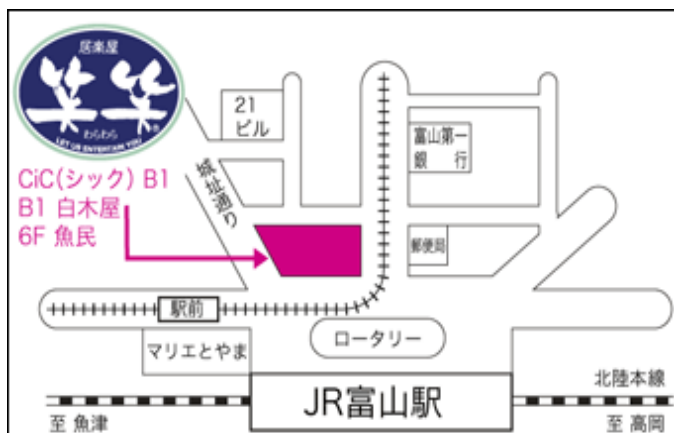
※参加を希望される方は3月8日までにtomidaikouko@yahoo.co.jpまでご連絡ください。

※費用は出席者の人数によって多少前後することがありますので、ご了承ください。

はなの舞地図



笑笑地図



## 編集後記

寒さの中にも早春の息吹が感じられるころとなりましたが、いかがお過ごしでしょうか。卒業はおめでたいことではありますが、お世話になった先輩方とお別れするのはやはり寂しく思います。またこの度は、お忙しい中、富大考古通信に原稿を提供していただき、ありがとうございました。皆様の御健康とますますの御活躍を願っております。研究室では4人の新2年生を迎えました。新たなメンバーを加えて、よりいっそう研究室の活動に励んでいきたいと思っております。

(北島裕子・瀬原史織)

富大考古通信 第八号

配信日 2010年2月27日

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福3190

TEL 076-445-6195

留守番アクセス 4000 BOX番号 6195

HP <http://www.geocities.jp/tomidaikouko/>

メール [tomidaikouko@yahoo.co.jp](mailto:tomidaikouko@yahoo.co.jp)

※メールつきましては、迷惑メールと区別するためタイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力して下さい。ご協力よろしくお願いたします。

